

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

19世紀中頃のリバプールとナイチンゲール

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳永, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000046

著作権は本学に帰属する。

報告

19 世紀中頃のリバプールとナイチンゲール

徳永 哲¹⁾

19 世紀に入って、リバプールは造船・港湾都市として急成長し、世紀中頃には、ロンドンに次ぐ国際貿易の拠点として栄えた。その繁栄の半面、アイルランドの大飢饉を逃れた難民が流れこんできた。彼らは地下室や袋小路の共同住宅に住み、劣悪な環境の中で悲惨な生活を送った。政治家であり資産家でもあったウィリアム・ラスボーンは貧民の救済に尽力した。彼は看護を専門職とする看護師を育成し、貧民家庭の病人を訪問させることを考えた。そのためのアドバイスをナイチンゲールに仰ぎ、指示に従って王立リバプール病院に看護師養成学校と看護師宿舎を創設した。さらに、彼は救貧院施療病院看護体制の改革にのりだし、ナイチンゲールの助力を得て、聖トマス病院ナイチンゲール学校の優秀な卒業生アグネス・ジョーンズを看護師長に迎えることができた。ナイチンゲールの最愛の教え子アグネスは貧民の看護に献身的に尽くし、人道の模範を示した。ナイチンゲール、ラスボーン、アグネスこの 3 人を結び合わせたものは友愛と平等であり、貧民救済への熱意であった。その力は墮落した病院の看護体制を刷新したばかりでなく、貧困と退廃に満ちた社会に希望をもたらしたのである。看護が社会を向上させることのできた稀に見る例であった。

キーワード：フロレンス・ナイチンゲール、ウィリアム・ラスボーン、アグネス・ジョーンズ、アイルランド大飢饉、リバプール、リバプール救貧院施療病院

I 緒言

2008 年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究費申請に際して、「研究課題」として「Nightingale の *Notes on Nursing* における看護の基本的精神に則った英語教育の方法に関する検討」をあげ、「研究目的」に「著書の難解な英文を文法的に正しく読み取るばかりでなく、著者の意図的背景を考慮しながら、さらに当時の政治的、社会的影響下にあった看護そのもののあり方を考えながら、大きな視野にたつて英文を読み取る」ことをあげた。

研究費申請当時、*Notes on Nursing* の序論の中に不可解に思っていた以下の箇所がある。

...whereas what we might call the coxcombs of education—e.g., the elements of astronomy—are now taught to every school-girl, neither mothers of families of any class, nor school-mistresses of any class, nor nurses of children, nor nurses of hospitals, are taught anything about those laws which God has assigned to the relations of our bodies with the world in which He has

put them.

以上の引用箇所には、女子教育でもっとも大切なことは、科学的な原理や知識を授けることではなく、神から授かった聖心の器としての身体に関する法則を教えることにある、と書かれている。前近代的とも思える宗教的な女子教育論は、紛れもなく、合理的な近代看護の確立者であり、女性の社会地位を高めることに貢献したあのナイチンゲールから発せられているのである。

その不可解な箇所を解明するには、ナイチンゲールのキリスト教信仰がどの程度のものであったのか、知る必要があると感じた。

親切なあるイギリス人紳士のお陰で、まず聖マーガレット教会(St. Margaret Church)を訪れることができた。イーストウェローの林のなかに佇む聖マーガレット教会はナイチンゲールに所縁の小さな教区教会であり、その墓地には彼女の墓碑が静かに立っていた。

Lytton Strachey が有名な著書 *Eminent Victorians*, Chatto & Windus 1918 でヴィクトリア王朝の偉人の

1) 日本赤十字九州国際看護大学



(聖マーガレット教会と墓苑。教会販売の絵葉書)

一人にあげているほどの人物ナイチンゲールが、この小さな教会墓地の一角に静かに眠っているのである。イギリス国教会の大聖堂の中かその墓苑ではないかと想像してただけに予想外であった。小さな教会と素朴な墓地、その雰囲気の中に立っていると、この世にはなく天に財を積むナイチンゲールの生き方が静かに伝わってきた。聖書の言葉に忠実に生きた証を見たような気持ちになったのである。

1829年に異教徒刑罰法 (Penal Law) が解けてカトリックが解放された。その後イギリスに修道院が復活し、貧民救済に献身する看護修道女たち (Nursing Nuns) の活躍が若い女性たちの心を惹きつけた。また、神の召命を聞き、それに忠実に生きようとする女性が多くいたともいわれている。ナイチンゲールも神の召命を受け、さらに看護修道女の影響を受けて、看護師への道を歩む決心をした一人であった。

次に、ロムジィのエンブリー・ハウス (Embley House) を訪れることができたことは非常に有意義であった。

周辺の美しい森林や田園風景の中で読書や思索に耽り、両親の反対に耐えながら静かに神の召命に応える



(エンブリー・ハウス、現在はパブリックスクールの一部として使われている。徳永 2008 年撮影)

道を模索し続けた乙女ナイチンゲールの姿を想像、実感できたからである。また、ナイチンゲールがエンブリー・ハウスを病院に変えて、ベッドをどのように並べようかと考えたことがほんとうにあったらしいが、その 3 階建ての大きなハウスに家族 4 人が暮らしていたことを思い合わせると彼女の気持ちが解るようだった。

ナイチンゲールは、1872 年から 1900 年に至るまで聖トマス病院のナイチンゲール・スクールの見習い看護師たちに書簡を宛て続けた。それは現在 *Florence Nightingale to her Nurses* として一冊にまとめられ Macmillan and Co. から出版されている。書簡において、若い看護師が貧しい患者を差別することなく受け入れ、キリストに倣う「神の王国」 (God's Kingdom) 実現への熱意を抱くようにという願いに貫かれている。「神の王国」はナイチンゲールの生涯を貫いた看護理念を表すものであるが、その基はエンブリー・ハウス周辺の森で一人静かに耽った読書と深い思索にあったのであろう。

ロンドンの聖トマス病院 (St Thomas's Hospital) やサウサンプトンやダービシャーなどのナイチンゲール所縁の地に加えてリバプールを訪れることにした。リバプールはナイチンゲールとの関連よりは、アイルランドの飢餓難民が住んでいた貧民街に関心があった。

ロンドンで、聖トマス病院のナイチンゲール博物館 (Nightingale Museum) から Cecil Woodham-Smith: *Florence Nightingale 1820-1910*, Contable, London, 1950 を入手した。索引からリバプールを逆引きしたところ、リバプール救貧院施療病 (Liverpool Workhouse Infirmary) でのナイチンゲールの最愛の教え子アグネス・ジョーンズ (Agnes Jones) の働きを知ることができた。その資料を求めてリバプールへ向かった。しかし、その成果は、地元の書店で地元出版の Peter Aughton: *Liverpool, A People's History*, Carnegie, 1990 を入手したに過ぎなかった。これには、19 世紀リバプールの歴史が詳しく書かれていた。リバプールの貧民救済と地域に合った看護のために生涯を捧げたウィリアム・ラスボーン (William Rathborn) の働きやナイチンゲールとの関係も知ることができた。

これら 2 冊の書籍のおかげで、研究費申請時に掲げた「研究目的」の「政治的、社会的影響下にあった看護」における第一歩を踏み出すことができた。

以上が、2008 年度奨励研究費を頂いてイギリスへ渡って直接得られた成果である。その成果を踏まえて、

本論ではナイチンゲールの看護理念が 19 世紀中頃の
リバプールにおいて、どのように具体化されていった
かを明らかにする。

II 研究方法 文献研究

ナイチンゲール及びアグネス・ジョーンズ関連 12 件、
イギリス及びリバプール関連 6 件、キリスト教及び修
道女関連 2 件、アイルランド大飢饉関連 5 件、合計 25
件の文献から研究を行った。

[文献一覧表]

関連別	著者 (編者)、著書、出版社、出版年など
<p>A. ナイチンゲール及びアグネス・ジョーンズに関連の文献</p>	<p>① Florence Nightingale Museum Guidebook</p> <p>② Florence Nightingale: Notes on Nursing, what it is and what it is not. Harrison, 59, Pall Mall, 1859. フロレンス・ナイチンゲール著, 小玉香津子・尾田葉子訳一看護覚え書き、本当の看護とそうでない看護ー日本看護協会出版会, 2004</p> <p>③ Cecil Woodham-Smith : Florence Nightingale 1820-1910, Contable, London, 1950. セシル・ウーダムスミス著, 武山満智子・小南吉彦訳ーフロレンス・ナイチンゲールの生涯、現代社, 1983</p> <p>④ Florence Nightingale: Florence Nightingale to her Nurses, Macmillan and Co., 1914. 湯槇ます, 小玉香津子, 薄井坦子, 鳥海美恵子, 小南吉彦編訳 ー新訳・ナイチンゲール書簡集、現代社, 2004.</p> <p>⑤ Lucy Seymer: Florence Nightingale, Faber & Faber , 1950. ルーシー・セーマー著, 湯槇ます訳ーフロレンス・ナイチンゲール、メディカルフレンド社, 1963</p> <p>⑥ Lytton Strachey: Eminent Victorians, Chatto & Windus, pp.135-203. 1918. リットン・ストレイチー著, 中野康司訳ーヴィクトリア朝偉人伝、みすず書房, pp. 5-75. 2008.</p> <p>⑦ Florence Nightingale Selected Short Writings on Nursing. 薄井坦子, 小玉香津子, 田村真, 山本利江, 和住淑子, 小南吉彦訳ーフロレンス・ナイチンゲール看護小論集ー健康とは病気とは看護とは、現代社, 2003</p> <p>⑧ 金井一薫著ーナイチンゲール看護論・入門 “看護であるものとなないもの” を見分ける眼、現代社, 2007</p> <p>⑨ 湯槇ます監修 ナイチンゲール著作集第 1 巻～第 3 巻、現代社, 1977.</p> <p>⑩ Hugh Small: Florence Nightingale Avenging Angel, Constable and Company Limited, 1998. ヒュー・スモール著, 田中京子訳ーナイチンゲール神話と真実、みすず書房, 2003</p> <p>⑪ 村岡花子著ー赤十字の母ナイチンゲール、講談社, 1981</p> <p>⑫ Florence Nightingale: Una and the Lion 1871, Kessinger Publishing, 2009. フロレンス・ナイチンゲール著, 小玉香津子・田村真訳ーアグネス・ジョーンズをしのいで 1871 年、ナイチンゲール著作集第 3 巻、現代社, pp. 243-615, 1977</p>
<p>B. イギリス及びリバプール関連の文献</p>	<p>① G.M.Trevelyan: History of England, Longmans, Green and Co.,1926. G.M.トレヴェリアン著 大野真弓監訳ーイギリス史 3、みすず書房,1975</p> <p>② David Hollett: Passage to the New World, Packet Ships and Irish Famine Emigrants 1845-1851, P.M.Heaton, Abergavenny, Gwent. 1995.</p> <p>③ Peter Aughton: Liverpool, A people's history, Carnegie, 1990.</p> <p>④ 角山榮・川北稔編ー路地裏の大英帝国、平凡社 1998</p> <p>⑤ 岩波哲学・思想事典、岩波書店、1998</p> <p>⑥ 角山榮・村岡健次・川北稔著ー生活の世界歴史 10 産業革命と民衆、河出書房新社、1997</p>
<p>C. キリスト教及び修道女関連の文献</p>	<p>① Sioban Nelson: Say Little, Do Much, Pennsylvania Press, 2003. シオバン・ネルソン著, 原田裕子訳ー黙して励め、日本看護協会出版会, 2004</p> <p>② 塚田理著ーイングランドの宗教、教文社, 2006</p>

D. アイルランド大飢饉関連の文献	① Larry Zuckerman: <i>The Potato, How the Humble Spud Rescued the Western World</i> . Faber & Faber, 1998. ラリー・ザッカーマン著、関口篤訳—世界を救ったじゃがいも、青土社、2003 ② 徳永哲著—アイルランド、ジャガイモ大飢饉研究、日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report 第4集、pp. 1-33、2005 ③ Cathal Poirteir: <i>The Great Irish Famine</i> , Mercier Press, 1995. ④ Cecil Woodham-Smith: <i>The Great Hunger Ireland 1845-49</i> , Old Town Book, 1989. ⑤ Kathleen Villiers-Tuthill: <i>Patient Endurance Connemara Girl Publications</i> , 1977.
-------------------	--

II 本論

1. アイルランド大飢饉とリバプール

1) リバプールという都市¹⁾

リバプールは17世紀頃、小さな港町であったが、産業革命以後、南北アメリカ大陸への貿易航路の拠点として発展を遂げた。19世紀中頃には巨大なドッグが次々に建造され、造船と貿易で、ロンドンに次ぐ大都市にまで発展した。ランカシャーからの鉄鋼製品や綿製品、ヨークシャーからの羊毛織物、ミッドランド地方の貴金属製品などがリバプールを經由してアメリカ大陸へ輸出された。また、アメリカ合衆国南部の生綿やオーストラリアの生羊毛、北アメリカ大陸から材木が陸揚げされていた。1846年に穀物法(Corn Law)が撤廃され、穀物の自由貿易が始まるとロシアから穀物がリバプール港に陸揚げされるようになった。世界各国から入ってくる香辛料、嗜好品、食物がリバプールの街に溢れ、肌の様々な色の人たちが街を行き交っていた。

その半面、リバプールが造船と貿易で発展していくにつれて、スコットランドやアイルランド、イングランド各地から労働者や海外移住を目指す人々が集まってきた。海岸線に居並ぶドックで働く港湾労働者の数は増え続け、さらに新天地アメリカへの渡航に失敗した残留移住者の数も増加した。ドックの周辺には貧しい労働者の街が広がっていった。リバプールは、多くの貧民を抱え、その救済に苦慮する都市となっていたのである。

2) アイルランドのジャガイモ大飢饉²⁾

1845年、ヨーロッパ大陸からイギリスを通過してアイルランドに渡ったジャガイモの疫病は瞬く間に全土に広がり、それまでアイルランド人が経験したことのない大飢饉を引き起こした。

ヨーロッパ大陸やイギリスは小麦などの穀物類を食の中心にしていたため、餓死者はほとんどなかった。それとは対照的に、食生活をほとんどジャガイモに依存していたアイルランド人民は飢餓に苦しんだ。しか

も、イギリス人支配による封建的な地主制度が残っていたため、当時、800万を超えていたと推定されているアイルランド人の大半が借地農民(peasantry)か、その下の小作人(cottiers)であった。借地農民と小作人は、借地農民がかなり広い土地を地主から借り受け、その借地の一部を小作人が借り受けるという又貸し借りの関係であった。

地主(landlord)はごく少数で、そのほとんどが、イギリスで清教徒市民革命を成し遂げたクロムウェル(Oliver Cromwell, 1599-1658)のアイルランド征伐の後に、土地の分配を受けたイギリス人貴族であった。大飢饉の時でも地主はアイルランド人を差別し続け、大農園にできた穀物類は、飢えたアイルランド人の目の前を通り過ぎて、ブリテン島へ輸送され、悪いことに、その穀物はリバプールで高値がつけられて、アイルランドへ戻って来た。

小作人は借り受けた1、2区画の畑にジャガイモを栽培し、収穫の一部を現金にかえて、地代として払い、残りのジャガイモを生活の糧にしていた。ジャガイモが腐ってしまうと、現金の備えがない小作人は餓死する以外に道はなかったのである。

ジャガイモの疫病は5年に及び、結局約5年間で餓死者が100万人を超え、海外への移住者も100万人を超えたとされている。

アイルランド人が新天地アメリカに渡ろうとしても、直接渡ることはできなかった。いったんリバプールに来て、それからアメリカ大陸へ向かう船便を待った。

アイルランド人が待った船便の多くは荷台を簡単な寝床にかえただけの貨物船であった。飢餓に苦しむ貧しい小作人家族は、教区牧師や良心的な地主からわずかな旅費をもらって、長男長女をアメリカへ渡らせた。まず、若者たちはアイルランドの各地からリバプールに渡って、船賃の安い貨物船の船底に乗り込んだ。しかし、こうした船は、軽い帆船が大半で、大西洋の荒波にまかれて沈むことがよくあった。それでアイルランド人はそうした移民船を棺桶船(coffin

ship) と呼んでいた。

3) リバプールにおける貧民層の拡大

1845 年秋以降アイルランドの飢饉は深刻化の一途を辿り、リバプールへ渡ってくる貧民の数は増加した。それと共に、貧民の生活環境の衛生状態が深刻な問題となった。1846 年、リバプール市はリバプール衛生法 (Liverpool Sanitary Act, 1846) を制定し、市長自らがリーダーシップを執って貧民層の環境衛生の改善に努めることになった。

しかし、1847 年には飢餓難民化した貧民がリバプールに流れ込んできた。David Hollett によると³⁾、1847 年にアイルランドからリバプールに渡って来た人の数は 296,231 人であった。そのうち、アメリカ合衆国へ渡航した者と商用などの一時的な滞在者を除くと、11 万人以上のアイルランド人がリバプールに残留したことになっている。

アイルランド飢餓難民の数は 1849 年以降減少するものの、また平均寿命が非常に低かったにもかかわらず、アイルランド人のほとんどがカトリックで多産だったため、結局リバプールの貧民層の人口は増え続け、市全体の人口を押し上げていった。

1841 年には 223,003 人であった市の人口は 10 年後の 1851 年には 376,065 人にまで膨らんだ。⁴⁾

貧民層の急増によって、リバプール市民の税金負担額も急増した。しかし、アイルランド貧民を救済しようとする動きは市民の間に高まっていき、慈善団体による、スープや食糧の配給など直接的な救済事業がなされるようになった。また、救貧院が建て増しされて収容人員が増やされた。こうした貧民救済への動きは本格化した。

1847 年、イギリス最初の保健医療医になった、リバプール出身のウィリアム・H・ダンカン (William Henry Duncan, 1805-63)、通称ドクター・ダンカンを長とする保健委員会が組織され、共同住宅 (court) が密集する貧民街の生活実態調査に乗り出した。⁵⁾

最下層の貧民 55,534 人が人口の密集した日当たりの悪い袋小路の共同住宅で暮らしている事実が明らかになった。袋小路の共同住宅には下水道や排水溝設備はなく、汚染された井戸を共有し、汚水は路上に撒き捨てられていた。疫病の発生源ともなる貧民の不潔な生活の改善が求められたのである。

その保健委員会はさらに、14,085 戸の地下室 (cellar) を調査した。地下室は本来、家主が衣料織機を置く部屋としてつくられたものであったが、住宅難にあえぐ

下層労働者やアイルランド飢餓難民のために住居として提供されていた。地下室の多くには、明かりもなければ換気扇もなかった。そのうえ、水はけが悪かった。調査の結果、地下室の生活者の総数は 27,123 人であり、5,841 戸に、床下によんだ水を溜めた井戸があることがわかった。地下室の多くが居住に不適切と判断され、家主に劣悪な生活環境の改善命令が出された。

4) 疫病の蔓延

1847 年、アイルランドからの飢餓難民はそれまでイングランドにはなかった病気をリバプールにもたらした。しかも、その一部はイングランド全体に広がっていった。

その年、アイルランドには、アイルランド特有の飢餓熱 (Famine Fever) と呼ばれていた流行性の熱病が蔓延していた。飢餓熱は主に発疹チフス (Typhus)、回帰熱 (Relapsing Fever)、壊血病 (Scurvy)、赤痢 (Dysentery) などであった。それに加えて、1848 年にはコレラ (Cholera) が流行した。⁶⁾

地主の冷酷な「追い立て」(eviction)によって、住む家を失い、暖もとれない哀れなアイルランド人がぼろを纏い、熱病に侵され、リバプールへ逃れて来た。彼らは新天地アメリカへ渡るだけの気力も体力も持っていなかった。

1848 年、アイルランド人がもたらす疫病を危惧したリバプールは、リバプール医療救済委員会 (Medical Relief Committee of Liverpool) を設置し、医療の面からの救済を始めた。

David Hollett によると⁷⁾、ウィリアム・H・ダンカンが調査したリバプールの 1849 年の年間病死者数は 17,046 人であったが、その数は前年より約 4,500 人増えたとなっている。前年 1848 年のデータの記載は無いので、正確な内訳を知ることはできないが、1849 年の病死者の病名と数は〈表 2〉の通りである。

〈表 2〉の病名の欄にあげている赤痢や発疹チフスはアイルランドの飢餓難民が渡って来る以前、イングランドやスコットランドではほとんど発生していなかった病気でされている。特に発疹チフスはアイルランド特有の病気とされていた。その二つの疫病は 1850 年頃リバプールからイングランド全体に蔓延し、貧民から上層階級に至るまで、多くの死者を出したとされている。

天然痘 (Smallpox) に関しては、イギリスでは種痘が法制化されていることから、アイルランドからの保菌者がリバプールで発症したと考えられる。麻疹

〈表 2〉 ウィリアム・H・ダンカン が調査したリバプールの 1849 年 1 年間の病死者数主な内訳

病名	死者数
コレラ	5,245 人
赤痢	1,271 人
発疹チフス	567 人
麻疹	419 人
百日咳	376 人
猩紅熱	317 人
咽頭炎	113 人
天然痘	68 人
梅毒	42 人

(Measles) や猩紅熱 (Scarlet fever) は、アイルランドで子どもたちが感染し、そのほとんどが死亡していたことから、アイルランドからリバプールにもたらされ、貧民層の子どもたちに感染し、栄養不足の抵抗力のない子どもたちが多く死亡したと考えられる。

コレラは 1848 年にアイルランドで大流行していたことから、アイルランド人からもたらされた可能性が大きい。

さまざまな疫病がアイルランドからの飢餓難民によってもたらされていることが一般に知られるようになると、市民の間に貧民層への差別意識が広まっていった。疫病の蔓延はリバプールの貧民救済を非常に困難なものにしたのである。

2. 貧民救済と新しい看護の確立

1) 貧困が生む絶望的な悪循環

国や自治体の医療保健機関が積極的に動くようになり、死亡率や平均寿命などの調査がなされ、貧民の生活実態がより明らかになった。そして、王立リバプール病院 (Royal Liverpool Infirmary) が開設され、救貧院の中にも施療病院が増設された。医療施設が拡充され、1850 年代の貧民層の生活は改善されたかにみえた。しかし、20 万人とも推測される貧民層の生活に、実際には大きな変化は起きていなかったのである。1860 年代に入ってなおリバプールの貧民の生活は変わってなかったことを示す数字がある。それは下の〈表 3〉に示されている。

〈表 3〉が示すように、1860 年代に至っても、出生後 5 歳未満児の死亡率が人口 100 人当たり 50 パーセント以上というのは他の産業都市と比べて一番高い。

〈表 3〉 イングランドの主要産業都市における人口 100 人あたりの 5 歳未満児の年平均 (1861-70) 死亡率⁸⁾

	年平均死亡率
イングランド全体	26.2%
リバプール	52.6%
マンチェスター	43.6%
リーズ	41.3%
ブレストン	39.8%
シェフィールド	39.4%

貧民街の生活衛生環境が改善されはしたものの貧民層の人口は減ったわけではなかった。周辺的生活環境が向上し、格差が広がる傾向にあったために、むしろ、貧民街はそれまで以上に閉鎖的な社会を形成し、拡大し続けたのである。貧民の生活は失望感で満たされ、墮落と退廃はさらに進行した。貧困は失望から墮落、退廃などを生み、それが必ず不衛生と結びついて疫病の感染を容易にするといった悪循環ができあがってしまったのである。

いったんこうした悪循環ができあがってしまうと、貧民は自分の力ではその循環を断ち切ることはできなくなってしまう。絶望的な状況の中で貧民救済のためにひとときわすばらしい力を発揮したのは、他ならぬ〈看護〉であった。

2) ウィリアム・ラスボーン の貧民救済と地域看護

ウィリアム・ラスボーン (William Rathborn, 1819-1902) は、1850 年代から 60 年代にかけて、貧困のために医療が受けられない貧民患者の救済に尽力した。彼は、キリストに倣って貧民救済のために行動するクエーカー教徒(Quaker)であった。クエーカーの特徴は、『岩波哲学・思想事典』⁹⁾によると、「制度や礼拝形式、教理などに力点を置かず、聖書を尊重するが、それよりも〈内なる光〉である全ての人の内に常に働く神の力を信仰の拠点」としている点である。その教徒の信条は人間の尊厳を重んじ、友愛と平等の精神で他者に接することであった。クエーカー教徒はアイルランド大飢饉の際、アイルランドの各地をまわってスープ・キッチンを開き、食糧を直接供給をした。アイルランドへ渡った他の慈善団体はアイルランド人をカトリックからプロテスタントへ改宗させようとしたが、クエーカー教徒は平等と友愛の精神によって、宗派に関係なく貧民を少しでも餓死から救おうと努めた。

ラスボーンとラスボーン夫人は Peter Aughton によると¹⁰⁾、クエーカー教徒として生涯を貧民救済のために捧げた。カトリック解放や奴隷貿易廃止の指導者にもなった。特にラスボーン夫人は女性的な発想から自己を犠牲にして貧民のために働いた。シャワーを持たない下層労働者のために公衆浴場と公共の洗濯場をつくって、公衆衛生の向上に努めた。また、コレラの犠牲者の服や寝具を消毒し、洗濯して、貧民のために再利用できるようにした。しかし、そうした献身的な働きが無理がたたり、病に臥してしまった。

ラスボーンは夫人のためにひとりの女性看護師を雇った。その看護師は夫人が逝くまで、献身的な手厚い看護をした。その働きぶりを見ていたラスボーンは、夫人の死後、1859年に自ら貧しい病人が在宅でも看護を受けられるような看護システムを思いついた。そして、夫人を看護してくれた看護師に対して、病院にかかれぬ貧しい病人の家をまわって看護をしてくれるように要請した。貧民の悲惨な生活実態を見て知っていた彼女は、当初、ラスボーンの要請を断った。彼女にとって、貧民の悲惨な生活の中に入って行くことは耐え難いものであったからである。しかし、ラスボーンは彼女を必死に説得した。ついに彼の熱意に負けた彼女は訪問看護の仕事を引き受けた。彼女は使命感を抱いて、恵まれない家庭を訪問し、看護の仕事に残りの人生をすべて捧げたのである。

1859年、ラスボーンはその看護師の仕事に刺激されて、私財を投じて在宅療養患者の看護を専門とする看護師団組織をつくる決意をした。そして、1862年、彼はナイチンゲールに手紙を書いてアドバイスを求めた。その手紙の内容については、Lucy Seymerによると、「貧民が、それぞれの家にいても病院にいると同じに、訓練の行きとどいた看護師さんに介抱してもらえるような制度をつくりたい」¹¹⁾ということであった。

ラスボーンに対するナイチンゲールのアドバイスは、王立リバプール病院にリバプール看護師養成学校(Liverpool Training School)と看護師宿舎(Home for Nurses)を開設すること、さらに地域の有力者の経済的援助を獲得することなどであった。正規の訓練を受けた看護師にはそれ相応の報酬支払う必要があるというのがナイチンゲールの持論であった。この点がナイチンゲールと看護修道女との根本的な違いであった。ナイチンゲールの考えでは、看護師はキリストの行いに倣って、献身的に貧しい病人のために働かなければならないが、同時に、看護職者としてそれ相応の報酬

がなければならないというものであった。それに対して、看護修道女はあくまでも奉仕であり、無報酬でなければならなかった。

1862年、ナイチンゲールのアドバイスに従ってラスボーンは自ら私財を投じて、王立リバプール病院のなかに看護師養成学校と看護師宿舎を開設したのである。

ナイチンゲールはラスボーンがやろうとしている新しい看護事業に格別な思いで期待を寄せていたに違いない。というのも、1842年にまで遡るが、ナイチンゲールは母親に連れられて、リーハースト・ハウスに隣接するハロウェイ村(Holloway Village)へ行き、飢饉に苦しむ農家をまわってスープと銀貨を配ったことがあった。その時以来、ナイチンゲールの心中には、誰からの援助もなく、ただ家の中にいて不安や病いに触まれ、死んでいく人々の姿が焼きついていたのである。

病人の家を訪問する看護師を養成したいというラスボーンの願いは、ナイチンゲールが抱き育み続けてきた彼女の看護理念の根幹に触れるものであったに違いない。ナイチンゲールは1882年の論文「病人の看護」において、在宅訪問看護を「地域看護」(District Nursing)と称して、「貧しい傷病者をその家庭で看護すること」であると定義し、看護の4領域、すなわち病院看護(hospital nursing)、個人看護(private nursing)、地域看護(district nursing)、助産看護(midwifery nursing)のうちでも「最重要の分野で、最高の資格を要求される」看護であると位置づけている。¹²⁾

やがて、王立リバプール病院看護師養成学校から正規の訓練を受けた看護師が輩出されると、リバプール市は18の地域に区分され、各地域に看護師たちが配置された。1867年、リバプールにおいて、イギリスでは初めての地域看護(district nursing)が確立されたのである。

ナイチンゲールは書簡において、「リバプールのように、家にいる貧しい病人たちのための地域看護を新しく打ち立てること、これこそ文明社会に住む人々が皆で力を合わせて行なうに最もふさわしい事業であるとはいえないでしょうか?」¹³⁾と新しく生まれた地域看護を称えている。

3) リバプール救貧院施療病院における看護の改革

次にラスボーンは、リバプール救貧院施療病院(Liverpool Workhouse Infirmary)の貧民患者に適切な看護を施したいと考え、当施療病院の看護の改革に乗り出した。

救貧院施療病院は1200人もの患者を受け入れてい

た。しかし、そこには正規の教育を受けた看護師はまったく存在しなかった。そのうえ、疫病の巣となっていた貧民地域から次から次に入って来る患者の数は受容数を大幅に上回っていた。実際の患者数は1400人を超えていたということである。特に、Cecil Woodham-Smithによると¹⁴⁾ 小児病棟では1台のベッドに何人も重なるように寝ているのが現状であった。それでも子供たちにとってはベッドの上で寝ることができるだけでも幸せであったらしい。

問題なのは、大人の入院患者たちであった。貧民地域でまかり通っている悪習、飲酒、痴行がそのまま病棟のなかに持ち込まれていた。しかも、貧民の中から看護師が雇われていたが、彼女は正規の看護教育を受けたことがなく、体力だけが売り物であったらしい。彼女たちは素行が悪く、患者と一緒に酒を飲んだりすることがあったということである。

一方、役人や管理者は貧民への偏見と差別を抱いており、救貧院施療病院の患者を正規の病院の患者とみなしていなかった。そういった意識は食事の悪さや病棟の不潔さに反映した。患者は栄養不足に陥り、病院内に飢餓や感染症が蔓延していた。不衛生な悪臭が施療病院内に立ち込めていた。しかも、監督官は教区委員会の役人で治安の維持だけを考え、重症患者は隔離して放置するという始末であった。

1864年、貧民患者にも正規の訓練を受けた看護師による看護を施さねばならないと考えたラスボーンはナイチンゲールに「もし、貴女が看護師団と師長を斡旋していただければ、貴女が適当と思われる額の給与は何年でも保証いたします」¹⁵⁾と聖トマス病院の看護師の派遣をナイチンゲールに要望した。しかし、聖トマス病院の看護師養成学校で訓練を受けた看護師を救貧院施療病院で雇うとなると、ラスボーンだけでなくナイチンゲール自身も予測していなかった社会の大きな壁が立ちふさがった。そもそも聖トマス病院の看護師養成学校は、ナイチンゲール自身が *Notes on Nursing* の印税から「ナイチンゲール基金」(Nightingale Fund)をつくり、それを基にして1860年につくった学校¹⁶⁾であり、ナイチンゲール・スクールと呼ばれていた。聖トマス病院の医師や看護師長などの授業を受けて高度な知識と技術を持った看護師が輩出されていたにもかかわらず、ナイチンゲールは一人としてリバプールへ派遣することはできなかったのである。

当時、救貧院に付属の病院は正規の病院として扱われておらず、キリスト教区の貧民救済施設のひとつに

なっていた。したがって、その管理運営は自治体ではなくキリスト教区委員会があたっていた。

貧民の品行の悪さに手を焼く教区委員会は救貧院施療病院の患者の看護を正規の訓練を受けた看護師にゆだねることに断固反対した。教区委員会は貧民を罪深い存在と見なしており、貧民の病いは貧民自身が負っている罪の報いであると思なす傾向にあった。高度な教育と訓練を受けた看護師が貧民の看護をするということは考えられないことであったのである。

しかし、救貧院施療病院における看護の改革は看護のあり方全体の改革でもあると確信していたナイチンゲールは、何としてでも教区委員会から許可を得ようと、ロンドンでその筋の有力者に働きかけた。しかし、教区委員会だけでなくイギリス社会全体に、宗教に根拠をもつ階層意識が根強く存在していて、保守的な秩序が重んじられていた。神に最も近い存在は王であり、もっとも遠い存在は貧民であるとする固定化された階層意識が教区委員会には根強く存在していたのである。

しかし、ある意外な、不幸な出来事がナイチンゲールの道を開いた。機知に富むナイチンゲールは、その出来事を事態好転の機会に変えたのである。寒いクリスマス夜、ロンドンのホルボーン救貧院(Holborn Union)に凍死者が出る事件が発生した。報道でも大きく取り上げられ、管理上の手落ちが指摘された。Cecil Woodham Smithによると¹⁷⁾、ナイチンゲールはそれを絶好の機会にして、ロンドン大司教区の救貧法監査官に手紙を書き、リバプール救貧院施療病院における看護改革計画を知らせたのである。それが功を奏し、その監察官の積極的な助力を得て、1865年、ナイチンゲールが看護師養成学校で育成した看護師派遣の許可がおりたのである。

4) アグネス・ジョーンズの働き

アグネス・ジョーンズ(Agnes Elizabeth Jones, 1832-1868)を総師長にして総勢13名の看護師団がロンドンからリバプール救貧院施療病院に派遣されて来た。

アグネス・ジョーンズはアイルランド北部の出身であった。彼女はクリミア戦争でのナイチンゲールの働きに啓発され、聖トマス病院の看護師養成学校に入学した。Cecil Woodham-Smithによると、ナイチンゲールが言うには、アグネスは「可憐にして若々しく、才能豊かにして機知に富み、ルイ14世が理想に描いた羊飼娘さながらの美貌を備えている」¹⁸⁾女性であった。

さらに、Cecil Woodham-Smithによると¹⁹⁾、アグネ

スは畜生以下の貧民患者の群れの中で、不屈な精神とすばやい機転で看護に励んだ。アグネスの注目すべき所は、救貧院施療病院の過酷な状況下にあっても、彼女が貧民患者を敵対視しなかったことである。彼女が敵と見なしたのは、偏見に満ちた教区委員会の役人たちであった。アグネスは彼らに貧民患者への公正と平等を求め、厳しく対立した。それはナイチンゲールが立っていた地平とまったく同じであった。しかし、アグネスと病院管理者との間に対立が生じる度に、ラスボーンはロンドンへ赴いて、ナイチンゲールに相談し、仲介に入ってもらったということである。

アグネスの看護への献身的で、ひた向きの姿勢は、やがて知事などの理解を得るようになった。救貧院施療病院の改革は進み、病院の評判も高まった。

しかし、評判の高まりと共にリバプール以外の地域から貧民患者が集まってくるようになり、施療病院の看護師は過重労働を強いられてしまった。1868 年、アグネスは疲労困憊の果て、病気にかかり、36 歳の若さで他界してしまったのである。

ナイチンゲールは、最愛のアグネスを失った時、「胸の張り裂ける思いでした」と書簡²⁰⁾の中で書いている。また、その年にエッセイ *Una and the Lion* を書いた。そのエッセイは 3 年後に再出版され、『アグネス・ジョーンズをしのんで 1871 年』²¹⁾ という表題で日本語に翻訳された。そのエッセイのなかで、ナイチンゲールは深い信仰心から、アグネスのことを「彼女ほど人間の賞讃を求める欲望から最も自由なときはなたれていた者はいなかった」²²⁾と讃えている。名声や名誉を得るために善を行う慈善家は欲望の奴隷であり、そこに真の自由はない。貧民患者の看護に自らを捧げることが喜びとすること、そしてそれを信仰の喜びと一致させること、そうした精神こそがナイチンゲールが求めた看護の精神そのものであった。

さらに、そのエッセイで、ナイチンゲールは「救貧院の病人は救貧院居住者として世話されてはならないのであって、貧しい病人として、キリスト教国にふさわしい病人として手当てを受けるべきである」²³⁾と書いている。それは、イギリスはキリスト教国でありながら、その信仰に相応しい看護がなされていないことへの痛烈な批判でもある。

また、ナイチンゲールはこうも書いている。アグネスは「神の武具をもて鎧い戦えとの天命に彼女は始終変わらず従順であった」²⁴⁾と。この一節は「神の武具」とは「聖書」(the Bible) のことであり、アグネスはそ

の教えに従い、いかなる欲望をも退け、貧民患者を救うためにのみひたすら戦い続けて死んだと理解できる。まさにアグネスは、ナイチンゲールが目指した「神の王国」実現のために戦った戦士であり、ナイチンゲールが書簡において病院看護職を目指す若者に説いた看護職者の理想像でもあったのである。

3. 結論

19 世紀中頃、リバプールはアイルランドからの飢餓難民を多く抱え、貧困と失望が蔓延する危機的状況の中にあつた。その危機を救ったものは神でもなければ、お金でもなかった。それは、リバプール市民の良心、ドクター・ダンカンのデータを重んじる科学的な精神、ラスボーンの平等主義と友愛精神の貫徹、そしてアグネスの貧民患者への献身的な看護など、まさに人の力の結集であつたのである。

さらに人の貧民救済への熱意と努力こそが自ずと看護のあるべき姿を模索し、新しい看護のあり方を生み出すことになったと言えるであろう。

平等と友愛という共通の地平に立ったラスボーンとナイチンゲールの連携は「地域看護」という新しい看護の概念を生み出したのである。この看護のお陰で、病院に通うこともできない貧しい病人たちはどれほど希望を与えられたことであろう。

また、リバプール救貧院施療病院において、ナイチンゲール、ラスボーンそしてアグネスが一体となって成し遂げた看護の改革は、看護の世界にとどまることなく、貧民に対する市政や国政のあり方にまで大きな問題を投げかけ、向上に導いた。そして、看護そのものがその職業領域を超えて、社会全体に大きな影響力を持つことができ、歴史を変えていく力さえ持つことができたのである。一つの偉大な記念すべき歴史的到来事が生み出されたのである。

III あとがき

2008 年度奨励研究当初に掲げていた「当時の政治的、社会的影響下にあつた看護そのもののあり方を考察する」という大きな「研究目的」を、リバプールとの関連において一歩前進させることができたと考えている。

さらにこの成果を基にして、2009 年度以降は 19 世紀のリバプールから巨大都市ロンドンに視野を拡大させ、社会的諸問題と関連させながらナイチンゲールの実像をより明確にするつもりである。

〔 受付 2009. 12. 7
 採用 2010. 3. 23 〕

本論の注

* [] 内の記号と数字は【文献一覧表】に記載されている関連別記号と文献別数字。

- 1) リバプールに関しては、[A-③] Peter Aughton: *Liverpool, A people's history*. pp.165-184 に拠ってまとめた。
- 2) アイルランド大飢饉に関する記述は [D-②] 徳永著に拠って簡潔にまとめた。
- 3) [B-②] David Hollett: *Passage the New World*. p.185 の記述に拠る。
- 4) [A-③] Peter Aughton: *Liverpool, A people's history*. p.187 の記述に拠る。
- 5) [B-②] David Hollett: *Passage the New World*. 第3章 *Liverpool, Gateway to the New World*, pp.54-65 には 17 世紀から続いていたアイルランドとリバプールとの関係が詳細に記述されている。特に 19 世紀になされた保健衛生の改善策やドクター・ダンカンの活躍が記述がある。[A-③] Peter Aughton: *Liverpool, A people's history*. pp.165-184 にもリバプールで行われた保健衛生に関する調査やドクター・ダンカンの活躍が記述されている。“cellar”と“court”については、Peter Aughton と David Hollett の記述を照合し、さらに [B-⑥] 角山榮他著を参考にしてまとめた。
- 6) アイルランドの疫病については [D-③] Cathal Poirteir: *The Great Irish Famine*, p.86-103 に Laurence M. Greary の飢饉と疫病に関する詳しい記述がある。
- 7) [B-②] David Hollett: *Passage the New World*. p.65 から表を作成。
- 8) [B-④] 角山榮・川北稔編、p137 に掲載されている表から引用。
- 9) [B-⑤] 岩波哲学・思想事典、p.378 から引用。
- 10) [B-③] Peter Aughton, p.202 に拠る。
- 11) [A-⑤] ルーシー・セーマー著、p.173 から引用。
- 12) [A-⑦] フロレンス・ナイチンゲール看護小論集、pp.1-18.に拠る。
- 13) [A-④] 新訳・ナイチンゲール書簡集、p.54 から引用。
- 14) [A-③] 武山満智子・小南吉彦訳、pp.215-7 に拠ってまとめた。
- 15) [A-③] 武山満智子・小南吉彦訳、p.211 から引用。
- 16) ナイチンゲールが自己の基金からつくった学校は聖トマス病院内の看護師養成学校とキングスカレッジ病院産科病棟の助産師訓練学校(Training School for Midwives)であった。[A-③] に拠る。
- 17) [A-③] 武山満智子・小南吉彦訳、pp. 211-13
- 18) [A-③] 武山満智子・小南吉彦訳、p. 214
- 19) [A-③] 武山満智子・小南吉彦訳、p.215
- 20) [A-④] 新訳・ナイチンゲール書簡集、p.53 から引用。
- 21) 原題は *Una and the Lion* となっており 1868 年に書かれ、*Good Words for 1868*, Strahan & Magazine Publishers. London,1868 に収められて出版された。日本語訳は [A-⑨] 『ナイチンゲール著作集第3巻』、pp.243-61 に収められている。
- 22) [A-⑨] 『ナイチンゲール著作集第3巻』、p.243 から引用。
- 23) [A-⑨] 『ナイチンゲール著作集第3巻』、p.250 から引用。
- 24) [A-⑨] 『ナイチンゲール著作集第3巻』、p.261 から引用。

Liverpool in the mid of the 19th century and Nightingale

Satoshi TOKUNAGA, M.A. ¹⁾

In the mid of the 19th century, Liverpool rapidly grew up and thrived as an international trade and a harbor city. On the other hand there were a lot of poor low-wage workers coming from Scotland, Ireland and Africa. Almost all of the workers lived in the poor apartments around the harbor. Poverty was one of the serious social problems, but in 1846, Liverpool faced a more serious, terrible occurrence, because Great Famine which occurred in 1845 in Ireland pushed a great many starved Irish people into Liverpool. When they came to Liverpool, they lived in the inferior environment such as 'cellars' or 'courts' on the dead-end streets. Although their living places became a plague spot, the poor people could neither receive any care nor enter the hospital.

William Rathborn who was a rich and influential person, established the home-nursing care system and built the Nursing School and the Nursing Home under Nightingale's advice. Moreover, he set about the renovation of nursing-care system in Liverpool Workhouse Infirmary. With the help of Nightingale, Rathborn could meet 13 trained nurses including Agnes Jones whom Nightingale loved most. Agnes devoted herself to poor patients and set a model of humanity.

What brought Nightingale, Rathborn, and Agnes together were friendship and equality, and enthusiasm for relief of the poor. Their power did not only renovate the nursing system of the workhouse infirmary but also gave the hope to the society full of poverty and abolition. It was a rare example that nursing could improve the society.

Keywords: Great Famine in Ireland, Liverpool, Liverpool Workhouse Infirmary, William Rathborn, Agnes Jones

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing